●進路指導部訪問

地方公立高校で「東大受験クラス」設置の試み その成果と今後の展望

――長崎県立長崎西高校進路指導部

「東大の地方出身者が減っている」とよくいわれるが、そこには東大を高根の花と諦め、地元国立大あたりを目標とする地方高校生が多いからかもしれない。そこに一石を投じようとしているのが、「東大クラス」を設置した県立・長崎西高校だ。その試みと今後の展望を聞くため進路指導部を訪ねた。

長崎県立長崎西高校は、県下でトップ、九州全体でも有数レベルといわれる進学校だ。例年九大など難関大や医学科などへ多数の合格者を輩出している。

その中で、例年1ケタ台だった東大合格者数が、2014年度入試では、14名を数える結果になった。ここには、2011年度から設置した「3年4組」――東大を目指す3年生を1つのクラスに集めた「東大クラス」の設置が大きいといえよう。

では、すでに難関大に多数の合格者を輩出している県下トップ校が、東大にこだわり、また一定の成果を上げつつあるのはなぜだろうか。また、その取り組みから、これからの進路指導のあり方として見えてくるものはないか。現在、長崎西高校で進路指導主事を務める堀光教諭らに話をうかがった。

浪人覚悟で今の一つ上を目指す

長崎西高校のキャッチフレーズは「鍛えて伸ばす」。高校入試の高いハードルを越えて入学してきた生徒たちだが、その彼らを、厳しい環境で学ばせ、より高い目標に挑戦させるというのが教育方針だ。進学に関する学習面はもちろん、これまでスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の実践研究校に指定されており、文系コースの生徒も含めた全生徒がなんらかの理数分野の研究に関わるという取り組みも進めている。また、約96％の生徒が参加しているという部活動でも、インターハイ優勝や毎年国体での出場経験を持つ体育部、さまざまなコンテストでの優勝が目立つ文化部など、文武両道を目指した実績も上げている。この「鍛えて伸ばす」の教育方針について、堀教諭は話す。

「本校の生徒は間違いなく将来の日本をリードする、世界を視野に入れて仕事をする人材だというのが校長の考え。われわれ教員も皆同じ思いで、生徒の持っている力を最大限に引き上げることに常に意欲的です。生徒には厳しい環境を課していますが、同時に教員も常に進歩がなければならないと新しい課題に取り組む雰囲気があると思います」

その一つとして、「東大クラス」の設置があったようだ。

「もともと本校では、九大などの難関大、あるいは国立大医学科といったところを志望する生徒、保護者が多くいます。もちろん、それはそれで高い目標ではありますが、さらにその上を目指すという気持ちがあってもいいのではないか、それだけの能力が生徒たちにはあるのではないか、というのがわれわれの気持ちでした。確かに例年、1ケタ台の東大合格者を出していますが、彼らと同レベルの能力をもつ生徒はさらに多くいるだろうと思うし、またそういう生徒を育てたいという意欲もわれわれの中にあったのです」（堀教諭）

そんな中、2011年度入試では、それなりの合格者が出てもおかしくないと思える生徒たちのほとんどが失敗するという結果になり、改めて東大合格者を確保する方策について考えなければならなくなったという。

「まず、自分の中で無理だと諦める気持ちを払拭させる。敢えて困難な道を選び、そのために着実に努力をする。これが『鍛えて伸ばす』ことだろうと、一人でも多くの東大志望者が増えるように生徒に呼びかけました。

ただし、2011年度入試の失敗のように、とりわけ東大入試の場合は、ある程度の実力があっても、その年の問題の傾向やほかの受験者の状況などによって、結果が変わってしまうというリスクがあることも伝えなければなりません。要するに、浪人も覚悟の上で挑戦していこう、ということです。そこまで生徒自身、それを導くわれわれ教員たち、さらにはもともと浪人させるというイメージを持っていなかった保護者に向けても理解・納得してもらわなければならないと考えました。実際に、前期試験で東大に失敗し、後期試験で受けた九大や阪大などに合格した生徒も、入学を辞退し、翌年再挑戦するというのです。その彼らを支援し、本人・保護者ともに納得できる結果を出す責任がわれわれ教員にはあるということです。

それには、東大志望者をひとつに集めて、特化した学びの環境をつくることがいいだろうと東大クラスの設置となったのです」（堀教諭）

いわば、東大クラスの設置は、校内で最高レベルの指導をするのと同時に、浪人すらも覚悟した強い意欲を持つ生徒のチームを結成するというわけだ。実際に、2014年度入試の14人の合格者のうち、現役生は4人。いわば浪人生の健闘によって達成された2ケタだった。

このクラスに入るための学内選考はなく、ただ、本人の意志で所属できる。文系・理系という枠すらもない。唯一のポイントは目指す大学が同じ仲間だということだ。

長崎西高校　進路指導主事
堀　光 教諭

●長崎西高校進路状況

	2014年			2013年			2012年			2011年			2010年			2009年			2008年			2007年			2006年		
大学名	現役	浪人	計	現役	浪人	計	現役	浪人	計	現役	浪人	計	現役	浪人	計	現役	浪人	計	現役	浪人	計	現役	浪人	計	現役	浪人	計
東京大	4	10	14	5	2	7	4	4	8	1	1	2	3		3	6	2	8	3	1	4	2	2	4	4	3	7
京都大	3	2	5	3	2	5	3	2	5				3		3		1	1	1		1				1	1	2
大阪大	9	2	11	5	4	9	8	3	11	9	3	12	4	2	6	10		10	2	1	3	1		1	2	1	3
九州大	33	9	42	46	12	58	28	12	40	32	8	40	44	9	53	39	10	49	32	6	38	32	2	34	22	5	27
長崎大	37	13	50	67	9	76	48	15	63	46	6	52	54	14	68	67	14	81	62	15	77	51	20	71	67	15	82
国公立大合計	205	60	265	249	55	304	196	61	257	173	37	210	209	46	255	206	44	250	178	44	222	165	46	211	187	47	234
私立大合計	130	110	240	149	69	218	200	67	267	130	68	198	157	81	238	161	91	252	186	111	297	184	86	270	240	86	326

例年九大など難関校には多くの合格者を輩出、東大にも１ケタ台の合格者を出しているが、東大クラスを立ち上げて３年目の2014年は、特に浪人生の活躍が功を奏して東大に14名の合格者となった。学校では、まずは15人を超える東大合格者を当面の目標として掲げている。なお、上記のうち、国公立大の医学科の合格者は、例年20名程度となっている。

生徒の潜在能力に気づくのが教員の力

東大クラスの設置によって、教員側の指導に関する考え方にも変化があった。そもそも、東大受験の指導も初めて、また浪人経験を持つ教員も校内には少なかった。進路指導部副主任・副島俊彦教諭は言う。

「生徒が自ら設定した高い目標に近づけてやるという指導は、ただ知識を与えるといったことでは済まないこと、つまり、その生徒の潜在的に持っている能力・才能を教員が見つけ出し、そこを大きく引き伸ばしていくというものでなければならないと気づきました。それには教員自身がこれまで持ち合わせていた知識や技術では不十分。担当科目の教員同士はもちろん、全科目の全教員が連携して当たらなければならないものでしょう。一般的には教員同士はお互いのスタイルを尊重して干渉は避けることも多いと思いますが、本校では、そうはいっていられない状況だと思います」

そうした教員同士の連携は、例えば、各生徒に対する詳細なデータ分析にも表れている。もともと全生徒に対して、全国模試や実力テストなどの結果はすぐさまファイリングされ、学力の伸びのチェック、どこで何につまずいているかという進度の段階を追ったフォローをしているが、東大クラスの場合は、全教科の担当教員と管理職が月1回集まって検討会を行い、学力の伸長のほか、授業内容や精神的サポート、保護者の考え方までも話し合い、指導方針が検討されていく。これにより担任が把握していない部分が共有され結果として全教員が協力し合う体制ができあがってくるというわけだ。

現役生・浪人生の共闘体制

そして、生徒の側でも、クラス全員が東大志望者ということで、仲間意識ができ、チームのような感覚で、モチベーションが高まっていったという。模試や日常の授業で、自信を失ったり、プレッシャーに耐えられなくなったりすることがある。しかし、周囲が同じような状況で、教員も自分の実力の変化に敏感に察知して対応してくれるとなると、受験生としての安心感が違ってくるのだろう。孤独な戦いという重荷を軽減することができるのだ。

加えて、浪人生との共闘が、現役生、浪人生ともに良い効果をもたらしているという。堀教諭は話す。

「浪人を勧めた手前、卒業後の生徒たちもフォローしていかなければならないと考えています。彼らと定期的に連絡を取っているのはもちろん、通っている予備校から少しでも不安材料の連絡を受ければ、すぐさまその生徒と連絡を取り、話を聞いたりもしています。

そうした関係から、現・浪の混合した勉強も行っています。例えば、現・浪に同じ問題を解かせ、それぞれの解答を見せ合うのですが、ここでは、思いがけない発見や刺激があるようです。センター試験後から二次試験まで、教室に浪人生を招き入れ、現役生といっしょに授業をするという試みもやりましたが、現役生のみならず、浪人生にも刺激を与え、意欲をかきたてることになりましたし、現・浪合わせた共闘する感覚も生まれたようで、受験での宿泊会場も、現・浪で同じホテルに泊まり、すでに合格したOB・OGたちまでが激励に訪れてくれています。とりわけ、実力が伯仲している東大受験生の本番となれば、精神面での強さが大きく結果を左右するということを考えても、彼らの中に自然に生まれたこの連帯は、心強いものになっているのではないでしょうか」

連携、連帯という意識は、「東大クラス」という旗印・拠点が明確になったことで、さらに強める効果があったということだろう。

●長崎西高校の演習テキスト(例)

左は長崎西高の数学演習テキスト。数学担当教員が、学年や志望校などに分け、それぞれに向けて作成した問題集だ。教員は一人ひとりの答案をチェック、それぞれの理解度などを把握して、次の指導の参考にしている。こうした教員によるオリジナル教材は、各科目それぞれに工夫されているという。

教員の努力のみに頼らないシステム作りが課題

当初、堅実な道を選びがちだった生徒たちに、さらに上を目指せるというビジョンを与え、またその目標実現に向けて教員・生徒が一丸となって当たる姿は、徐々にではあろうが、着実に実績として数値に出てくるものだろう。ここには、浪人も辞さないという生徒の意気込みを促し後悔をさせないという教員の責任感が相乗的に押し上げる力になっているのがわかる。浪人は避けたい、避けるべきだというこれまでの常識を破り、生徒たちに潜んでいる力があるなら、それなりの試練を伴いながらも、それを最大限に引き上げるという指導は、あるいは埋もれてしまうかもしれない才能の発掘につながるものでもあろう。

しかし、その推進力は、休日を返上し夜遅くまで勤務する教員それぞれの努力によるところが大きいようにも思われる。今培っているノウハウの蓄積が、例えば受験生が陥りやすいポイントを、膨大な先輩たちの答案の中から検索してみつけることができるといった、効率的なシステムとして組み上げられるようになれば、今後、より大きな成果が出せるようになるかもしれない。

今後の課題について、堀教諭は次のように語る。

「東大クラスの設置は、われわれも過渡期にできた一つの方策だと考えています。本来は、通常のクラスのなかで、希望する生徒を希望する大学、東大に合格させるという姿でありたいと思っているのです。鍛えれば光り輝く生徒がともすれば埋もれてしまっているということを忘れず、その能力の発掘に努力を惜しまないという本校の姿勢は、これからも変えてはいけないと思います。

公立高校である本校の教員も、いずれ県内の別の学校に異動することになりますが、この気概だけは、どこに行っても持ち続け、広めていくことができれば、生徒の可能性をより広げる教育につなげることができるのではないかと、私は思っています」

地域や現・浪といった枠など、固定観念に縛られると、画一的な進路・キャリア設計に陥ってしまうだろう。東大をはじめ、日本の多くの教育機関が多様性、国際性へ向かって脱却を図ろうとしている今、地方公立高校の教員たちによるこの試みは、時代に即した動きにつながるものかもしれない。

●長崎西高生　学校評価アンケート
（生徒全体・平成25年度）

	YES 評価（%）
学校の校訓「自律」に基づいて指導がなされている	87.3
授業はわかりやすい	95.6
教科の質問に熱心に対応してくれる	98.2
挨拶や服装等、生活態度についてきちんと指導してくれる	96.4
進路に関する情報を適切に提供してくれる	91.0
先生は親身になって相談に応じてくれる	91.8
楽しみな学校行事が多い	71.6
健康管理について指導を行ってくれる	81.1
部活動が盛んで活気がある	93.2

アンケートは各項目「よくあてはまる」「ほぼあてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の４つから選択。「YES評価」とは、そのうちの「よくあてはまる」と「ほぼあてはまる」の回答を合わせたもの。「教科の質問に熱心」「授業はわかりやすい」といった項目にほとんどの生徒が、YESとしているように、教員の日常的な奮闘ぶりがうかがえる。生徒の信頼も厚いようだ。